

Title	西洋古典(ギリシア・ローマ)文学の立場から
Sub Title	Classical literature
Author	藤井, 昇(Fujii, Noboru)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1965
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.19, (1965. 1) ,p.26- 35
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特集 : 文学・芸術に現われたる女性像
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00190001-0026

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

西洋古典（ギリシア・ローマ）文学の立場から

藤 井 昇

はじめにお断りしておきたいことは、以下の拙文が一種の問題提起であって、主張を目的とするものではないといふことである。従って三人の発表者の御意見に則して、なるべく当日何の用意もなく出席した私の心境をありのままに綴ってみた。他の発表形式も考へてみたが、種々の考慮の末、右の書き方を選ぶことにした。発表者に対する個人攻撃のやうに映る文があったら、それは私の筆の拙さにすぎない。

たいへん面白いことに、同じヨーロッパ文学を対象としてゐながら、中田美喜君（ドイツ文学）の発表は、最も古代地中海文化の思考様式に近く、これは結局キリスト教の問題にしばられ、これに対する批判はむしろヨーロッパ中世の研究者にお任せすべきであると思はれた。所謂「永遠の女性」、騎士道の問題などはとても私の手に負へない。ただ、発言はしなかったが、「永遠の女性」の概念は解放前のロシア文学にもあり、会のものち厨川文夫教授が個人的に私に示唆された「中世とアラブ文化」を、私はギリシア正教会によつ

て代表されるビザンチン文化の問題と結びつけて興味を感じたが、これは更に私の専攻領域から外れる。西洋古典学徒としては、むしろマリア崇拜が公認された宗教会議がエペソスで開かれたことに、古代アジアにおける大地女神崇拜とのつながりを問題として質問された松原秀一君（中世フランス文学）の発言に、多少の飛躍を感じつつも、一つの見方を与へられた。中田君の「ギリシア悲劇を題材としたドイツ文学」に現れるギリシアの女性は、既にルネサンス以後のキリスト教文化の洗礼を受けたヨーロッパ人——特にゲルマン系ヨーロッパ人——の見たギリシアの女性にすぎないやうに思った。

註 * ただしギリシア正教は未だにマリア無原罪説を認めてゐない。

八代修次君も美術史の立場から美しい女性像をスライドで見せてくれたが、たとへばカリテスの三女神の如きは、既に三柱に限定され、恐らくはゼウスの娘として捉へられた一種の抽象概念の神格化であることは、名称からもあきらかであつて、かかるギリシア的抽象化はそれ自体として一つの古典学の課題ではあるとしても、三柱以上であつたと推定される更に古き世に溯らないと、「女」の本質が掴めないやうな気がした。

註 * 見せて頂いたのは、紀元七〇年ポンペーイ出土のもので、カリテスがゼウスの娘とされたのはヘーシオドス以後とされてゐる。カリテスの母親にエウリュノメー、ヘーラーの二説あることが問題で、その理由は後述する。* * カリテスはカリスの複数形で、意味は「輝くもの」「喜ぶもの」→「優雅」と転じ、ローマ神話ではグラチエ・グラーチエ・グラーチエ・グラーチエ (Gratie (▽) Graces) となつた。なほ、カリテスのうち、アグリタイアといふ名の女神は、やはり「輝き」の意味を持つてゐる。

三人の発表者はそれぞれに造詣を傾けられたのであつたが、私が一つ気がついたことは、問題の追求が階級の視野からなされてゐないといふ共通点であつた。「同一の生産手段の所有形態の下においては、必然的に同一の文化現象が現れるか否か」を問題にせずして、東洋の文学における「女」と西洋のそれとを比較しても、それは知的な興味に終りはしないか？ 所謂 *Mimesis* の *Mime* は動詞 *meinen* と同根であると聞かすが、後述するやうにかういふ発想はラテン系の *amor* とは趣きをやや異にする。中田君の発表を私はさきにキリスト教にしばれると感じた、と書いたが、この場合、キリスト教とは、家父長制的支配形態の所産としてであり、たとへばクリュタイムネーストラアの「不義」を、ドイツの演劇がその悲劇性のみを極めてドイツ的に受容し、完成させながらも「不義」そのものに検討を加へなかつたことは時代の制約として無理からぬことと思ふが、彼女を「不義」とした古代ギリシア人の解釈そのものが、母

系制社会の伝承を父系制の道德観から解した結果ではないかと一応疑つてもよい民俗学的考察（たとへば兄妹相姦も、母系制下では支配権確保のための血族婚にすぎない）が、*Wissenschaft* を誇るこの国に何故早くから發生しなかつたか——女性の服従を有利とした当時のドイツの支配層が、無意識的にせよ、*不義* による父系秩序の混乱を悲劇として美化することによって、自らの搾取態勢を容易ならしめたといふ構造がそこにはなかつたのか——といふ問題を説明して頂きたかつたし、八代君のスライドで最も興味深かつた旧石器時代のアプロディーテー像（ヴィレンドルフ出土67ペイヂ参照）の豊かに誇張せられた乳房に、なぜそのやうな女性像を古代人が作つたかといふ動機として、豊饒を祈る呪術性をもつと強調して頂きたかつた。これに關聯して私は、(1) 普通には処女神とされてゐる女神アルテミスのポトニア・テローンとしての性格、(2) ゼウスの浮氣、の問題を挙げてみた。かういふギリシア神話の問題は、その支配階級による作為性において日本神話の成立と一種の共通点が見られる。（これについては筑紫由真氏「アマテラスの誕生」はかを参照されたい。）ギリシア民族が二回にわたり南下して現在のギリシアの地に定住するに至つたことは、「海」を示す単語 *thalassa, tta* が非印歐語族のものとして推定されることその他で、定説と考へてよいと思はれるが、当時既に父系制社会を確立してゐたギリシア民族の最高神は当然男神たるゼウスであつて、先住民族のとどめてゐた母系制社会とその必然的所産たる女神との結婚は、先住民族の靈力を奪ふために最も適切な神話であつた。普通にはアポローンの聖地とされるデルポイも、巫女の棲む地下の一室に「大地」^{ガイア}（女性名詞）と判読できる文字を彫つた石（オムパロス）があつたことから、石そのものの崇拜とともに、古いエーゲ文化の大地女神崇拜の地であつたと推測せられてゐる。ヨーロッパに多い、王子が他国を流浪して種々の試練に耐へ、つひに「お姫さま」を手に入れる説話や、完全な家父長制社会であつた黄金時代のローマにおける氏の最年長の女性が持つてゐたふしぎな慣習の權威——日本で言へば「本家のおばあさん」のその如き——は、後述する「遊女」の教養の高さなどと共に、母系社会の殘影を以てはじめて解釈しうる現象と言へよう。私はエンゲルスを有力な根拠として母系制から父系制への推移を土地私有の發生、侵略的國家の形成から説明したいと思ふのであるが、さうした「理論」よりも、ブラジルの奥地に現存する一種の「若衆宿」（邦訳クセジュ「仮面の民俗学」P. 25の「入団」の項参照）や本年五月三十日「朝日新聞」に紹介されたニューギニアのウギンパ部落の「男の家」と「女の家」、ダニ族の女性の強い發言權、などを参考としたい。このやうな見方は屢々十九世紀的実証主義者や感情的、反民主主義者から否定されるのであるが、文献のない時代はやは

り民俗を一つの材料として仮説を立て、それによって自然に解釈できる事象が多ければ、一応その仮説を仮説として使用すべきであらう。その場合、民主主義の裏づけが正しいか否かは、いづれ将来の歴史が審判を下すであらう。このシンポジウムでは「醜女」や「悪女」の問題が英・仏・中国各文学の研究者から提出されたり、女性美の表現形式の固定化の問題も出たが、美醜の問題は、ギリシア・ローマでは狭い額が美しいとされたことだけを述べて、詳細は拙論「ホラーティウスの女性」にゆづり、「悪女」の問題はそれ以前に善悪の基準の問題が論理的に要請されるから、これはここまでお読み下さった私の立場から御推察願ひたい。また女性美をたたへるレトリックの固定化は少くとも安東伸介君（英文学）の発言中であつたやうな意味では私の知るかぎり古代ギリシア・ラテン文学にはないと言つてよいと思ふ。当日時間がなくて述べられなかったが、ドン・ファンの問題が出、塾でイスパニア語を教へてゐる身として、ティルソ・デ・モリーナの「ドン・ファン」がソリーリヤの「ドン・ファン・テノーリオ」に至る過程に既に変化が見られる事実と、「ドン・ファン」の原型をイスパニア文学の所産たるピカレスク文学の伝統とする見解があり、ドン・ファンをただの女たらしと見るとは——のちの変化はいざ知らず——光源氏に対する誤解と同じで、甚だ危険であることを一言しておきたい。

註*これは既に創世紀による「女」の創造説話に反映されてゐる。* * cf. *Indones: ibu kota (kota < Str.), ibu laki, ibu warna (warna < Str.);* [中]「拇指」「母錢」〔宋史〕字源。スマトラ南部には今も母系制の名残ありといふ。* * * この機会に、故折口信夫先生も私有財産の所有の正当性を歌や物語によつて伝へてゆく必要——宗教的裏づけを以て——を考へてをられる（日本文学史ノート）九二頁）ことを述べておきたい。* * * * 「西洋古典学研究」第四巻、一九五六年（岩波書店）。

さて檜谷昭彦君（国文学）の発表が、西洋古典文学の立場からは最も興味があつた、と言へば意外に思はれるかもしれないが、(1) 前述の階級的立場からの解釈、(2) 如何にギリシア思想で武装しても本質的にセム族の陰影を持つキリスト教の支配下におかれた紀元後の西欧と、仏教といふ元来アリア系の思考に育てられてきた日本、かうしたことを思へば、かりに(1)を除くとしても、古代地中海文化と日本の伝統における「女」のあり方の類似を、単に偶然の一致とは片づけ難いやうに感ずる。たとへば、後期のラテン語は「美しい」といふ語を *forma* (〈*formosus*, *hermosus*) に求めたが、*forma* (英 *form*) は「仏法」の「法」(*Str. dhama; Pali dhamma*) に結びつき、これは真理とは人格神でなく、「理法」(宇宙の秩序)であるとする思考形式で、「諸神もまた創造の此方に属する」とす

るウパニシャッドの宇宙生成説や、釈尊以前に古仏を設定する論理構造においても、更に歴史的には、前四世紀マウリア王朝のチャンドラグプタ王とアレクサンドロス王との会見や、ミリンダ王問ミリンダ経など、キリスト教以前の西欧とインド思想とはかなりの接触があったと推定されるのである。檜谷君自身の発表は、その性格上、当然かかる問題には触れず、(A) 室町末期の文献に見られる美女の名を列記した文学、(B) 元禄時代の女性像、その他に限定されたが、(A)は揚貴妃や物語伝説上の女性であって、未だ *human* なものに乏しく、私たちの立場からは(B)以下に展開された「遊女」の問題に最も関心を寄せざるを得なかった。シンポジウムの方向は「遊女」の美しさの変遷史に中心が終り、村松暎君(中国文学)による中国のそれとの比較が興味深く論ぜられたが、ギリシア・ローマ文学の「遊女」との比較としては、日本において三味線や文才の如き「芸」がこの種の女性に要求され、素人の女——メイト地女——にそれが欠けてゐること——地女からはむしろ家事の手腕の如き「主婦」性が要求されたことが、「遊女」の発生史とからみあって、注目された。かういふ伝統はつい最近まで日本の「芸妓」が持つてゐたプライドであり、「芸妓」ならぬ「娼婦」ですら、神社の近くに娼家があったりして、古代ギリシアと同じく「ヘトロイコイ神娼」の名残りを無意識裡にとどめてゐたのである。この「神娼」についてのヘーロドトスの記述その他に触れる前に、日本の場合、下町の老舗などで、「旦那」が、良家の子女を本妻として持つほかに、芸妓を落籍ヒカせて妾としたことや、青年が正規の結婚前に吉原通ひをした慣習に、さほど罪悪感が伴はなかつた事実を挙げておきたい。すなはち、これらは階級観に基因する意識であつて、「本妻」といふものは「家」を守る「主婦」、そして父系社会の極たる長子相続制に必須の「母」であり、さうした売春婦を供給した小作農の上に君臨した地主階級にあつては、「母」と「労働力」としての「妻」の座には、今日考へられるやうな「愛」の要素は殆どなく、あつたとしても自然発生的なもので、この点、ギリシア・ローマ社会とかなりの類似が見られるのである。大家の主婦にとつては、階級的に下である「妾」ふせいに嫉妬を抱くこと自体が既にわれとわが身を卑しめることであり、「性」の必然としては嫉妬しても、公然と騒ぎ立てることは、はしらないこととされ、一方「妾」たちも分を弁へて、技芸・文才の誇りに生きつらぬくといふ凛々しいまでの、秩序への「反逆的服従」がそこにはあつた。少々話が飛ぶが、嫉妬 *jalousie* はギリシア語の *zelos* に源を引き、*zelos* 「熱意」(*zeal*) には既にエウリピデースに「競争心」の意の使用があるが、松原秀一君によると、ヘテロイコイ 仏語史上 *jalous*、*amour* は、共にラテン語 *zelosus*、*ambor-em* に出でながら、ラテン語の *z* がフランス語で *e* となる原則 (*e.g.* *honor-em* > *honneur*) に反し、

特に *jaloux* の *a* の如きは他に類例がなく、少くともこの二語は *provençal* 經由説等、学者によって様々であると言はれ、ともに「女」と切り離せない語だけに、文化史的にも注目すべき現象であって、こんな所にもシンポジウムの意義があったと思はれる。

註*彼女たちは酒を飲むことをへ、はしたないとされてた。(Kiefer: *Sexual Life in Ancient Rome*, p. 22. このシンポジウムののち邦訳が出た。 **「朝日ジャーナル」本年六月二十一日号、六六頁に見える故三木武吉氏の「妾」観が興味深い。なほ、このあたりの記述は拙稿「ソークラテースの妻」(「三色旗」第一九八号、一九六四年)の一部と重複する。 **ラテン語では「嫉妬」には *invidia* (*in-vidio*) が用ひられるが、この語も所謂 *evil eye* の民俗信仰を底に持つてゐる。 ***a* は *provençal* から説明しえなく。英語 *jealous* (*Ancren Riwle*) を *Meyer-Lübke* から求め得たが、恐らく *A.F. gelus* から来たと思はれる *Mod. E. jealousy* の *-ea- [e]* は *φυ-εε-* と綴られたもの *φυ-εε-* の説明には何の示唆も与へない。

さて、ギリシア・ローマの「遊女」であるが、かの名妓ライイスが *θη* といふ非印欧語要素を持つ古都コリントスの産であることは、さきの「神娼」の語が本来男女共性名詞でありながら、女性名詞として使はれる場合、特にコリントスのそれを指すことが多い事実が注目される。歴史的には、ヘーロドトスが書きとどめてゐる如くバビュロンやリューディアといったアジア起源の慣習で、ギリシアではキュプロスといふアプロディーテー女神と切り離せない土地にこの制度があり、婚前の処女が一定期間豊饒の大地女神の婢として仕へ、地域によってはこれによって婚資を稼いだといふ記述もあるが、やはり宗教的動機が先であらう。いづれにせよ古代社会の女性は神と人との媒介者であつて、マリアが処女にしてキリストを産んだといふこと、キリストが神の子であるとされたことは、処女²の概念の変化によって奇蹟とされたにすぎない。そして、ギリシア・ローマの恋愛文学に現れる女性は、カトゥルスのレスビアなど少数の例外を除いて、そのほとんどが、既に神娼の栄光から転落した「あそび」の対象としての奴隷もしくは解放奴隷の売春婦であつた。このことは「遊女」を意味する語がギリシアではヘタイラー(「仲間」)であり、時代の下つたローマ社会では「商品」化して *meretrix* (「稼ぎ女」)、悪口としては *lupa* (「牝狼」) と呼ばれた経緯を暗示させると同時に、彼女らの「芸」や「教養」がこれに比してさほど低下せず、ソークラテースに第二の妻ミュルトローがゐたとか、その他(信憑性はともかく)当時の指導層の人人が「遊女」に入れあげ、その死するや豪華な記念碑を立てたといふアテナイオス第十三巻の諸所に見える記述を説明する。ローマでも、ホラーティウスは生涯妻帯せず、琴に長けたリユデー、笑みも優なるララゲーなど、美しい遊女の名を後生に残してゐる。

註* コリントスにはアプロディーテーの神殿があった。cf. Strabo 378; Athen. XIII, 573-4 * * * I, 98, 199 以下。 * * * *ibid.* * * * Val. Mar. II, vi, 15 * * * イタリヤ半島の先住民民族エトルスキの間では、性道德が乱れて来たように言はれるが、ギリシヤでは「タイラー」のみが宴席に待つことを許されて来た時代が長く、そこから見た偏見ではないかと M. Palatino 氏は示唆されている (The Etruscans, p. 215)。 * * * cf. Athen. XIII, 605, b

しかし、このやうな女性の転落は決して意識されたものではない。私は古代社会で決して（現代的な語義で）成立する筈のない「詩人」といふ職業（特に *vates* なる語の価値、感、の変遷）やここに取り上げた「遊女」の持つ重さを民俗から解釈しようとは思ふけれど、当時の時代意識は既にふかく家父長制の支配体制に影響されて来たことも述べておかねばならない。ヘーロドトスが「神娼」のことを特に記した心情それ自体既に父系制を疑はぬ人の驚きであり、インドの「ヌマの法典」さへ、女性を田地にたとへることを「聖伝」としてゐる点が僅かに注目されるのみで、完全な父系制的法体系と言へよう。Oxford 古典学辞典は、初期のキリスト教会が女性を更に男性に隷属せしめた事実を、Tertullianus, Augustinus, Hieronymus を引いて説明してゐるが、「現代の意味での）『文学』が女性と共に始まる」といふことは、被支配層としての女性の、闘争か、然らずんば彼女が諦念に達するまでの苦悩の記録としてであった。アントーニウスとクレオパトラの「恋」は主にブルータルコスによる創作で、この男女はアジアといふ侵略の目標を心に秘めていはば狐と狸の化かし合ひをしたにすぎず、アウグストゥスがこれをすかさず利用し、「いやしくもローマの武将たる者が女に祖国を売って」といふ論理を以て、おのが帝政支配の地歩をかため、解放奴隷の子であったホラーティウスもこれを歌っておのが保身をはかった。アクティウムの海戦はほとんどアントーニウスの自己崩壊であったと一史家は解してゐるし、ウエルギリウスが長詩「アエネーイス」において英雄（*vir*「男」）アエネーアースにカルターゴの女王ディドーを捨てて「ローマ建国」の「大義」に殉じせしめたのも、国家の成立に不可欠な男性の優位をアウグストゥスに示さねばならなかったためであることは、同じ作者の「牧歌」に歌はれた支配者の大土地占有を裏づけとして推測し得よう。

註* 所謂ガレーノスの分類による *artes liberales* の系譜は、はるかに降って日本の大学の「教養課程」の構想に結びつくが、当時の分類では肉体労働は蔑視され彫刻でも *artes vulgares* に入れられた。 * * * 岩波文庫版 IX, 33, 37 (p. 266) * * * 福田恒存氏の言と記憶するが、同氏はこれを社会的には捉へて置かれなかつた。 * * * G. Ferrero: *Characters & Events of Roman History*, 1909 (筆者による教科書版、文藝堂、1963)

年あり)。また、小説ではあるが、M・ユルスナル「ハドリアヌス帝の回想」、多田智満子氏訳、白水社、1964年、七二頁にも同じ解釈が出てゐる（ハドリアヌスが正しい発音だが、訳者は意識的に長音を無視されてゐる）。***この作品の冒頭に出る語。尚、virtue といふ英語も、その原形 virtus「男らしさ」に由来する。なほ、この解釈は Ferrero, Quina らに基づいたものである。

さて、当日のシンポジウムで、最も印象深かつたのは、女に当然關聯する「愛」の概念であり、私は檜谷君に「愛する」といふ表現が明治以前の日本文学に理念化された形で使はれてゐる例があるか否かをうかがひ、檜谷君の否定的なお答からかねてよりの私の考へ——恋愛は「欲る」と同根の「惚れる」、^{*}「恋ふ」は活用を異にこそすれ「乞ふ」であつて、「愛」は日本では仏教的な「渴愛」として、否定さるべきものとして受け取られ、親鸞の罪悪感も女身に触れることにはなく、女身に触れてなせ悪いかといふ、国家鎮護の要請に大乘の本質を見失つた天台教学に対する「庶民」の実感から、疑ふことのできない「本能」の叫びであつて、これが明治時代に至つて、仏教が支配者の保護を失つたときに、清沢満之師のエピクテトスへの傾倒、そしてその流れを引く曾我量深師の「本能即」「本願」といふ大乘の本質に復帰した事実を、国内的には支配者との關係において、また国外的には上述のアーリア的思考と結びつけて必ずしも偶然ではないとする解釈——の傍証として得たやうに思つた。ギリシア人の「愛」もまた「欲する」に出で、ラテン語の amor も Skr. kam (= 'to love') と同根で、動詞語幹 amā- は Gk. háma, Skr. sam ya 'ゲルマン系の語 zusammen, 同 same などが証することく、本来「合一」といふ極めて具体的な「性」sex のなざしめる行為であつて、神エロースの射る矢に対する人間の抵抗の無力さは、「愛」をまつ如何ともなし難い「本能」の力と見た古代的思考を示してゐて、エロースのラテン名クピドーも、^{*}to desire を意味する動詞 cup-ere (cf. Skr. kupa = 'to be in active motion,' 'to be angry') に由来し、後世の理念的な「愛」の理想化は見られず、むしろ生きとし生けるものの根源的な「いのち」そのものが「愛」であるとされたことは、ルクレーティウスの最初にみえるウエヌスへの讃歌にも明らかであり、クピドーがウエヌスの子とされる理由も判るのである。男女の恋もさうした生成発展する「いのち」の一現象にすぎない。私は実地の経験から Ovidius あたりに出る venus を訳すとき、日本語の「セックス」が最もよくあてはまる「事実」を指摘した。人はよくエロースに対するアガペーの優位を説くが、後者は動詞 agapáo に出で、P 音の説明を保留したままとはいへ、agapáo と ágamai の同系はほぼ定説であつて、ágamai は古義「驚く」から「感嘆する」を経て、agapáo「大切に扱ふ」に結びつく。

これを「精神的な愛」としてエロースよりも上位においたギリシア哲学は、かのイデア説と同じく、奴隷労働に依存して「清談」に耽つてゐた有閑階級の観念的産物である。Skj. Knopが「活動力」を示し、「怒る」ことすらものの生成に結びつくかうした古代人の心は、サノヲの国造りにおける神の怒りを「人」の達しえない明澄のすがたとして包容し、肯定された折口信夫教授によって既に歌ひ上げられてゐる。

註* 文語なら「惚る」である。なほ、イペロ・ロマンセでは「恋ふ」に動詞 *querer* (∧*Lat.* *querere* = "to seek to get"; "to desire"; *cog.* *re*) (*re*) (*quire*) を用ひ、これと思ひ合はせて面白ひ。* 奴隷の身であったエピクテトスは、自己の安心立命を、環境との戦ひによりはむしろ外的条件を内的必然として受け取るストア哲学の方向に求めた。これは結局観念上の「自由」にとどまつた。清沢師にもこの傾向が見られ、これは金子大栄師に継承されて、同じ門下の眺鳥敏師と著しい対比を見せてゐる。* * * ラテン語の *smilis* の *sim* も、同系。* * * つまり行為そのもの、性器、更に原意の「性」など、わが国のいかがはしい雑誌に見られる多義性を示す。* * * シンボジウムののち、森武之助教授から、「御大切」なる邦語が、神の愛を示すために宣教師によって原意の "urgency" を失ひ、今日の "importance" へと移つたことを教へて頂き、早速「タイセツニモユル」(日葡辞書)などの実例を知つた。禪家の「一大事」がこれに影響してゐるか否かは詳らかにしないが、少くとも当時の外国人宣教師が「愛」の語を採らなかつたことは注目に値する。尚 *asapado* に当るラテン語は *dingo* であり、やはり「敬意」を含む。

Venus が「セックス」だなどといふ下品な表現を用ひず、松原君は地中海文化圏の「愛」が「空腹だから食べる」といふやうな即物的なものだったことをはば私と同じ見解に立って発言され、西欧中世における「女性崇拜」の発生と、これにつながる冒頭の「永遠の女性」への志向をどう解釈するかについて、ケルト起源説、Norman Frenchの影響、Vikingsによるシチリア占拠とダンテに代表されるトスカーナ文学とシチリア文化の関係、南仏抒情詩(プロヴァンス語)とイペロ・アラブ文化の関聯の有無など、いろいろな面を問題と与へて下さつた。先に述べた聖母無原罪説と女性の理想化——非生産的観念化——は、何れが先行するのか私は知らないが、アシアの大地女神信仰は既にあまりにも遠く、私如きに結論は下せない。ただ私が常に感じるのはラテン詩人の中でただ一人、ウエルギリウスを持つ異質性で、たとへばカトウルルスやプロペルティウスの持つ哀愁を「人生における哀愁」とすれば、ウエルギリウスのそれは「人生の哀愁」と言へよう。そしてガリリアのマントウアに生れた彼には、ケルトの血が混つてゐたといふこの一事がなにか私の心に残るのである。いづれにせよ、私は質問に立って教へられ、自分の領域として与へられたギリシア・ローマ文学についての管見を述べる

時でさへ、自分で自分に質問してゐたとも言へる。(一九六四年夏)

註*拙稿「MARTIALIS になさるゝ金銭」(『西洋古典学研究』第十二卷) p. 74 参看。* * しかしケルト人の間では「男色」も盛だったと言はれぬ (cf. *Athen.* XIII, 603, a)。

附記——海津忠雄君(美術史)から、アマゾン川の語源について御質問を受けたが、「ア」を否定の接頭辞として「乳房なき者」とする説明は、古くからある「伝承」としてとめておくのが無難であるとの結論に達した。長髪のスキユタイ人を女と見誤ったのかもしれない、とも言はれてゐる。次に本文中の△印は、「三田新聞」第一〇一八号の拙論紹介の内容と異なる。たとへば「三田新聞」では「解放奴隸」に触れてゐない。しかし、これは拙論の紹介者大浜甫君の責任ではなく、筆者の質問の拙劣さに因るものである。大切なことなので、一言すると共に、大浜君のためにこれを述べておきたい。また、「元老院議員及びその階級の者」や「一部の生来自由人」は、黄金時代のローマにあつては、「解放奴隸」、「俳優」、「娼婦及びその周旋業者」と婚姻することは法的には認められず、認められるやうになつても身分、財産上の損失を伴ひ、多くは「内縁」*concubinatus* にとどまつた(船田「ローマ法入門」二二三頁以下)ことも附記しておかう。(以上)